

島根県弓道連盟

—— これまでのあゆみ

本連盟は、昭和25年9月に設立されてから令和6年で74年が経過するが、ここでは、この10年程度の間で特筆すべき出来事について記載する。

全日本弓道遠的選手権大会の主管

平成25年10月18日から20日まで、出雲ドームで第64回全日本弓道遠的選手権大会が開催された。本大会は、出雲大社の遷宮と重なるこの年に、島根県弓道連盟として大会誘致に成功し、主管した。

18日は全国から選抜された男女206人の選手が集まった。審判会議終了後、本部役員と選手は、60年ぶりの平成の大遷宮に沸く出雲大社へ公式参拝した。



遠的大会競技

この後、第84代出雲大社司宮の千家尊祐氏のご厚意により、神聖な瑞垣内のご本殿の周りを巡る「お庭ふみ」を体験させていただき、参加者一同感動したことも想い出の一つである。

通常の遠的射場は矢道が屋外となり、風雨の影響も発生する。しかし、今回は出雲ドームでの開催により、照明には気を遣ったが、風雨については全く考慮することがなく、選手は好記録を連発していた。特に、出雲ドームの電光掲示板に競技中の選手名を表示することが大変好評で、参加選手には満足をしていただけたことと思う。

本大会は、本連盟のポテンシャルを大幅に引き上げ、また会員それぞれに大きな自信をもたらしてくれたものと確信している。

全日本弓道選手権大会優勝

全日本弓道選手権大会は、東京と伊勢において隔年で開かれ、優勝者には天皇・皇后賜杯が与えられる弓道に関わる者にとって最高の権威を持つ大会である。島根県からも毎年選手を選考し出場してきたが、決勝への進出すら果たせずに50回以上が過ぎていた。

小原裕幸選手（教士）は松江北高校で弓道を始め、進学先の岡山県では同県の国体成年男子メンバーとして第60回岡山国体で遠的・近的ともに優勝するなど素晴らしい実績を持って、平成20年、島根県に戻ってこられた。選手権大会は平成22年の第61回大会に初出場され、2回目の第63回大会で初めて予選を突破して5位に入賞。さらに平成27年の第66回大会では準優勝と優勝への期待が高まってきた。

そして迎えた平成28年の第67回大会は9月16日から18日まで東京の全日本弓道連盟中央道場で開催された。採点制の予選で小原選手は参加選手106人中5位の成績となり、20人で争う決勝へ進出した。決勝は1人10射の的中制となる。小原選手は1本目を外してしまっただが、そこからは落ち着いて的中を重ね、残りの9本を詰めた。他の選手が全て8中以下であったため、ここに小原選手の優勝、島根県に初めての天皇賜杯がもたらされた。



小原裕幸選手

小原選手の活躍は若手の弓道選手にも大いに刺激を与えている。小原選手のさらなる活躍と2度目の賜杯獲得に期待している。

—— 現在の状況

令和3年度の全日本弓道連盟の登録者は約13万6千人で、弓道の競技人口は20年前に比べ増加している。島根県においてはやや減少しているが、一般8支部、大学4支部、高校22支部、中学3支部で1千人弱の会員が在籍している。男女比はほぼ同数だが、高校生は少子化と部活離れで他の競技人口が減少している中、武道の中では弓道が最も多く、島根県においては会員の3分の2を占めている。

これまで数々の全国大会で優勝や入賞を果たすなど活躍している本県の高校生が、進学や就職などの節目でも競技を継続してもらい、一般を含めた競技者全体の増加につなげていくことが課題となっている。

—— これから

弓道は自分の体力に応じた強さの弓を使うことで、年齢や男女の制限なく長く続けられる競技である。現在、2030年島根かみあり国スポが近づく中、弓道競技においても、上位入賞を目指して選手強化に取り組むとともに、大会をつつがなく運営するために役員養成を進めている。このような取り組みを進めることで、国スポを成功裏に終えることはもちろんだが、国スポを通じて育った人材が国スポ後も長く弓道に関わり、島根の弓道をますます発展させることにつなげていきたいと考えている。